

家具よもやま話 No. 4

小長谷 光



古い椅子や家具が続いたの
で今回は1947年発表のもの
を取り上げました。

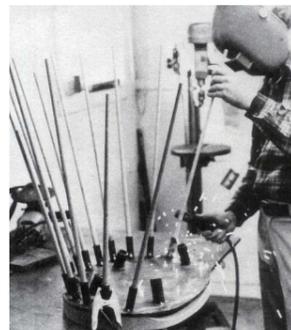
皆さんご存知のピーコック
チェアで、デンマークのデザ
イナー、ハンス・J・ウェグ
ナーの代表作のひとつ、現在
も製造されています。

孔雀が羽を広げたように見
えることから友人でありライ
バルだったフィン・ユールが
名付けたそうです。背もたれ
のスポークが矢形をしている
ことから“アローチェア”と
も呼ばれています。

17世紀イギリスのウィンザーチェアが発想の源になっている
ということで、随所にその仕口や技術が見てとれます。

製造上難しいのは、背の円弧状
の曲木フレームと座枠に対して
矢形のスポーク全てが違う角度で
差し込まれていることでしょう。

写真①はウィンザーチェアの座
板に背のスポークと脚を差し込む
穴加工を同時にできるような治具を
製作しているところで、座板の形
状に加工したスチールプレートに
スポークと脚それぞれの太さと角
度を合わせたスチールパイプをド
リルのガイドとするため溶接して



写真①



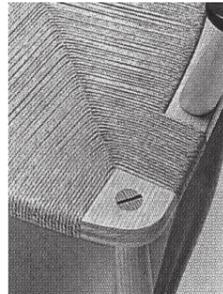
います。

ピーコックチェアもおそらくこのよう
な治具を用いているのではないでしょ
うか。

前脚が座枠を貫通し座枠表面に足の断面
が同面に収まり、補強のクサビが違う素材
で意匠を兼ねて打ち込まれていること(写
真②)や、平面で見てH型のストレッチャ
ー(トンボ貫)に肘の前束が座枠を貫通し
て固定されていることも強度的に理にかな
っており、これらもウィンザーチェアの影
響と考えられます。

主材はアッシュ、汚れやすい肘は色の濃
いチーク、座はペーパーコード編みです。
1953年にはよりソフトな感触の張り包み
のもの(写真③)が発表されましたが、私
としてはこれは全く別物と思いますし、す
でに製造中止となっています。

ちなみに余談ですが、私とピーコック
チェアは同じ1947年生まれです。



写真②



写真③

展示会 予告

インポッシブル・アーキテクチャー 建築家たちの夢

会場：国立国際美術館（大阪・中之島）
会期：2020年1月7日（火）～3月15日（日）

政治的な思惑や技術的な理由で実現に至らなかったものから敢えて実現を
目指さなかったものまで。20世紀以降の国内外の未完(アンビルト)となった建築
に焦点を当て、それらを「インポッシブル・アーキテクチャー」と称し紹介。

ハンス・ホライン、レム・コールハース、安藤忠雄など約40人の建築家・美術
家の作品を通しインポッシブルな要素を読み取る。監修は建築史家五十嵐太郎。

インポッシブルという言葉は、たんなる「不可能」ではなく、建築の可能性
に目を向けることで逆説的に建築の可能性や豊穡な潜在力が浮かび上がる
ことを意図する。ザハ・ハテイド「新国立競技場」も展示される。

乞うご期待。



藤本壮介 ベントハラ・ウォーターフロント施設 2012年



ヤーコフ・チェルニホフ
「建築ファンタジー 101 のカラー・コンポジション」 1933年



ウラジミール・タリト
第三インターナショナル記念塔 1919年

編集後記

インテリア設計士の試験では
「和風」に関する設問が多く見ら
れます。OISでは関西の伝統建築
や庭園の見学をなるべく多く企画
したいと考えています。紙面には
従来の見学記だけでなくおすすめ
の展覧会情報も掲載します。

葉知利書はOIS会員の情報発信
の場として年4回定期発行します。
これぞという情報はどしどしお寄
せください。(と)



大阪府インテリア設計士協会

〒541-0059 大阪市中央区博労町1-6-14
TEL. 06-6262-1488 FAX. 06-6262-1553

URL <http://jp-interior.or.jp/ois>

E-mail ois@jp-interior.or.jp

facebook「大阪府インテリア設計士協会」

4.7.10.1月 4回 / 年発行

発行人：河野 洋二

編集：OIS 第1事業部会

祝

インテリア設計士 合格おめでとう!

No.108

第59回インテリア設計士 合格者名簿

(敬称略)

<1級>

佐藤 瑠子 (社会)

<2級>

伊澤 未稀 (修成)

今岡 菜々 (修成)

小川 隼勢 (修成)

尾田 夏碧 (中央)

神西 結子 (中央)

刈田 周治 (修成)

川上 駄亜夢 (中央)

小林 雅也 (中央)

小森 慎也 (修成)

首藤 悠斗 (中央)

田中 創大 (社会)

田中 正子 (修成)

谷口かれん (中央)

谷村友紀奈 (中央)

西野 龍二 (中央)

花田 誠 (羽衣)

久田 礼花 (中央)

松岡 矢澄 (大芸)

三浦 和紗 (大芸)

三野なつみ (羽衣)

向 内 萌 (修成)

柳井 裕喜 (中央)

吉岡亮太郎 (修成)

凡例

大芸=大阪芸術大学短期大学部

修成=修成建設専門学校

中央=中央工学校 OSAKA

羽衣=羽衣国際大学

社会=社会人

HASHIRIGAKI

葉知利書



第59回インテリア設計士の合格者を対象とし
た証書伝達式が9月25日、梅新東にあるスーパ
ードライ梅田で行われた。

7月6・7日、今年の検定試験は天候にも恵ま
れ全国12所属協会20会場で実施された。受験者
数は787人(合格者561人)、昨年の761人から26
人のアップ、そのうち大阪は39人(同24人)と
いう結果であった。

伝達式は始めに、河野会長から祝辞があり、

続いて出席者6人に証書・資格登録カード・ラ
ベルピンと記念品が贈られた。

参加役員による自己紹介のあと、合格者から
も、自己紹介をかね今後の夢などを1人ずつ
話をして頂き、和やかなうちに散会となった。

2025年大阪万博の開催も決まりインテリ
ア・建築ブームとなっています。資格を手
にして、皆さんが自信をもって、望む仕事に進
んでください。期待しています。



佐藤さん



神西さん



川上さん



小林さん



西野さん



花田さん

ビアパーティー報告



今年のビアパーティーは難波高
島屋の屋上にある「キラビア」で
7月18日に実施しました。

60種類の野菜を使った肉・鶏・
魚料理など30種類の豊富な料理が
強みです。途中、雨が降って来ま
したが、なんとか持ちこたえました。
金曜で人が多く、料理をとる
のにも大変でしたが、参加者14人
まずまず楽しめたのではないでしょ
うか。(記・事務局)

竹中大工道具館見学記

「匠の技と心を未来へ伝えたい」というコンセプトで創られた、日本唯一の大工道具の博物館「竹中大工道具館」を訪れ、6月16日、各々が思い思いに見学した。

この美しい博物館は新神戸駅からすぐ、竹中工務店本店跡地に建つ。ダブルアーチ架構による無柱大空間や天井の美しい木材仕上げ、相じゃくりの天井加工など建物そのものが竹中工務店の作品となっている。一步入った途端、日本人のDNAに記憶されているのであろうか、木の心地よさに包まれて心を打たれる。品質のよいものほど磨耗するまで使われ、結果的に後世に残らない運命にあるが、幸運にも古い時代の優れた大工道具をはじめとする35,000余点に上る貴重な道具や資料が収集・保存されている。展示からは道具を使いこなす技と知恵、そこから生まれる建築と木の文化だけでなく、職人と日本人の心に触



れることができる。吹き抜けにある高さ7メートルを超える国宝「唐招提寺金堂」の柱と組物の実物大模型が目を引く。織田信長の元家臣竹中藤兵衛正高が神社仏閣の造営に関わったのが同社の始まりであり、その歴史と誇りをイメージさせる。数寄屋造りの茶室では、手仕事で和の建築をつくりだす職人の技をスケルトンで実際に見ることができる。各コーナーでは参加者が資料として撮影するシャッター音が絶えなかった。子供が大工と一緒に楽しめる木工や、宮大工から直接プロの技を体感できるイベントやプログラムも組まれており、またぜひ訪れたいと思う場所であった。(記・山田 弘美)



写真協力 / 奥田 忠彦

聴竹居みどころ

12月8日(日)に「聴竹居」の見学会を催します。以下にその見どころをご紹介します。

聴竹居は1928年(昭和3年)、京都帝国大学教授・建築家藤井厚二により設計され、自ら家族とともに住み、「日本の住宅」について思想と設計手法を実証した環境共生住宅です。木造モダニズム建築の傑作として2017年に昭和の住宅で初めて重要文化財に指定されました。

藤井は環境工学の先駆者で、日本の気候風土に合わせ経験的に受け継がれた家造りを科学的な目で捉えなおす研究を進めました。温湿度のデータをもとに人間が快適な状態(室温17.78℃、湿度65%)を明らかにし住宅設備に生かしました。具体的な夏の暑さ対策として床下、天井裏の換気や通風、空気の循環をデザインしています。庇の出を計算し日射熱の遮断等を配慮するなど快適・健康に暮らす工夫が随所に見られ、現在のパッシブデザイン住宅の基本がなんと90年前に実践されています。

欧米視察経験から単に欧米を模倣するのではなく、日本の生活様式に西洋的な空間構成を融合させる新しい住宅の計画デザインを探る一方、茶道・華道を嗜み、陶芸を趣味とするなど日本文化に精通し設計意匠に生かされています。

住宅建築だけでなく椅子・ベンチ・テーブル収納等、家具、照明、絨毯、日用雑器から自著の装丁に至るまで、デザイン全般にこだわりました。晩い紅葉の季節、忙しさを忘れ名建築に耽り、藤井の業績を回顧しませんか。(記・事務局)



映画とインテリア No.2 今井 俊夫

今回ご紹介するのは「風と共に去りぬ」(1939年/アメリカ)。原作:マーガレット・ミッチェル、製作:デヴィッド・O・セルズニック。主演はヴィヴィアン・リー、クラーク・ゲイブル。

舞台は、奴隷制度が残る1860年代(日本は幕末期)のアメリカ南部・ジョージア州。南北戦争前後の動乱の中、強く逞しく、したたかに生きる主人公たちを描いた一大叙事詩です。戦争の悲惨さやそれに翻弄される人間模様、愛憎、差別等社会の構図がありありと映し出されています。

さてインテリアに関して、この映画に登場するプランテーション経営者の屋敷はともかく豪華。主人公スカーレット・オハラが欧州貴族館を彷彿とさせる邸宅広間の大階段を颯爽と下りてくるシーンが有名です。映画としては見せ場ですが、デザイン史で見ると手放して喜ばせません。

欧州では18世紀終わり頃から、産業革命による近代化に伴い貴族階級が没落し、変わって力を持ったブルジョワジーたち。古い制度から解放された彼らが求めたのは新しい時代に則した合理的なデザインではなく、過去の様式を模倣した復古調デザインでした。当時の建築家たちは過去の歴史的様式を批判的に捉えず、逆に懐古し折衷する「歴史主義」や「折衷主義」に陥り、骨董品を寄せ集めたようなデザインになってしまいました。アメリカでも例外でなく、この映画の豪邸セットが当時の支配階級の好みを象徴しているように思えます。



一方、映画の中で荒廃した台所や庶民的な居間に置いてあるコロニアル様式のラダーバックチェアやウインザーチェアが目にとまります。ウインザーチェアは植民地時代にイギリスから持ちこまれ、以降アメリカで独自に発展します。これらの椅子はシェーカーチェアに影響を与えました。

シェーカーチェアは、18世紀後半から19世紀にかけてシェーカー教徒達がアメリカ北(東)部ニューイングランド地方及び、その周辺で自給自足の集団生活を営み、その中で普段使いの家具として作り出されたものです。その特色は、不必要な装飾を排し実用性に徹したデザイン、確かな技術に裏付けられた丁寧な仕事にあります。「まるで天国でデザインされ、天使によって伝えられた」という形容される美しいプロポーションが特徴です。

全編231分。名プロデューサー、セルズニックの執念が結実した傑作です。暫くDVDを事務局に預けますので、時間と興味のある方は是非ご覧下さい。



レバノン・ロッキングチェア (レバノンとはシェーカー教団の共同体・地名)



ウインザー・ボウバックチェア

※いずれも「インテリア設計士テキスト学科編」に載っています。

TALK-PAL 23 2019.8.19 楽しく・継続がモットー

新しい、若い会員さんの比率が上がっていますので、TALK-PALの経緯を少し振り返ってみましょう。

事務局が現在の場所に移ってスペースに余裕ができたので、誰もが集まって話し合える場を設けることになりました。そこで、話し合い=TALKとビルの名前=PALをくっつけTALK-PALとし、さらに、TALK→トーク→19の語呂合わせで開催日が決定、初回は1992年3月でした。

しかし、マンネリ化に勝てず一旦消滅、2015年10月に復活しました。

毎回、食品ロスが心配されるほどの食べ物が集まりますが、今回は皆さんが気遣ったのか、ちょうどいい加減の量でした。盆休みの話、最近世間を騒がせている話題、マインドナンバーによる2019年下半期の運勢占いは、「ええ、そうなの」「かも知れないね」などの反応もありました。中でも「2か月に1回というペースがちょうどいい」という感想には同感です。

参加メンバーが固定化されている点、若い会員が少ない点が少し気になりますが、来たい人が来たい時だけ来るという気楽な気持は、ずっと続くものと信じています。

格好よく言えばポットラック、一人一品持ち寄り、これは現在多くの人々が楽しんでるパーティー形式です。反面、ハード



ルが高いと思うのかもしれませんが、でも心配はご無用です。昨夜のおかずの残りでもいいのです。青年部主催のデザイナーズバーがなくなった昨今、何はともあれ、ふらっと顔を出してください。きっと気に入ってハマってしまうかもしれませんよ。(記・奥田 忠彦)